

教養学部の思い出 ～日々の授業より～

言語文化学科教授 津 上 誠

私の赴任は教養学部創立7年目に当たる1996年4月のことだったので、創立直後の教養学部の様子はあまり知らない。赴任後、今日に到る23年間の中で、地域構想学科の立ち上げ時期や、お二人の教養学部長の下で言語文化学科長をやっていた時期など、立場上、教養学部全体を見渡す側に立つ時期が少しはあったが、教養学部の歩みを思い出のように語るような資格が自分にあるとはどうしても思えない。むしろ私としては、何のドラマもない日常の話になってしまうが、ただの学部教員として普段どんな風に働いていたかの思い出を語りたい。これを語ることによって、教養学部教員たちが、私のしてきたような小さな努力を積み重ねて行き、それらの集積が教養学部というユニークな学部を続かせ、ひいては大学を支えてきたのだということを、示してみたい。

ということで、教養学部教員だったら誰でも知っている日常仕事（教える仕事に限る）を、「津上の場合はそうだったのか」と思ってもらえる程度にはユニークさを交えながら、思い出話のように語ってみよう。私の専門は文化人類学なのだが、毎週学生に対して教える時間は、これまで、前期後期でそれぞれ週10コマ程度だったと思う。授業のカテゴリー毎におよそのコマ数を示すなら、文系他学部1-2年生対象の「教養教育科目」が週2コマ、教養学部の学生相手である「学部専門科目」が週1コマ、言語文化学科の学生が対象である「学科専門科目」が週2コマ、そして総合研究指導が週6コマ、といったところである。以下、これらのカテゴリー別に、私がどんな風に仕事をしていたのかを述べていく。

文系他学部向けの「教養教育科目」として私がずっと受け持っていたのは『文化人類学』であった。人数が多く1クラス500名を超えることもあり、この数年は大分改善されはしたものの、まだまだ教育環境上好ましい人数とは言えないのだが、私は授業開始時期に多数の受講生達に対して、「君たちが大学に来るのは、手に職をつける為だけなのではない。卒業後に君たちが生きる場所のどこにおいても繰り広げられている様々な『アタリマエ』に対して『ちょっと待って』と言って新しい提案が出来る人になるためでもあるのだ」というようなことを、必ずといってよいほど言っていた。「教養教育科目」（非専門科目と言った方が正確なのだが）というカテゴリーにどんな科目を設定するかについて大学としては色々な意図

があったのだろうが、『文化人類学』は以上のようなセンスを磨く科目であって欲しいという願いが込められて設定されているのだと、私は信じていた。そして懸命に授業をした。うれしいことに、どの年の授業でも強い興味を示してくれる他学部学生が必ずいた。学科専門科目を教える立場にある教員が自学科の専門分野の内容を他学部学生に対して、あえて網羅的ではなく、その代わり学問としての存在意義がわかるよう換骨奪胎して教えるというのは、他学部学生にとり貴重なことなのだろうと思われる。

次に「学部専門科目」についてであるが、私はこのカテゴリーでは、自分が属する言語文化学科だけでなく人間、情報、地域の学科学生たちにも文化人類学的なものの考え方を学んでもらい、その学びを自分の専門分野に関連づけてほしいという気持ちで色々な授業をした。教養学部向けの『文化人類学』はある時期まで必ず私が担当していたが、その後入れ替わるように『宗教と人間』という授業も半分受け持つことになった。思い出深いのは、教養学部のオムニバス授業『現代社会の諸問題』である。この授業に私はしばしばかり出されていたからである。覚えているものだけで言っても、「教育」「自然環境保全」「安全」「昭和30年代」「恋愛」「性」といったテーマを掲げたオムニバスものに合計十数年は出るようになった。大体において出番は3回だったのだが、どのテーマの時も学部学生たちは、「うちの学部にはいろんな先生がいるもんだ」という顔をして、面白そうに聞いてくれていた。

最後のカテゴリーである「学科専門科目」には、学術における読み書きの基礎を教える『基礎演習』や学科専門教育の基礎としての『文化基礎論』というのあれば、より専門性の高い『現代の文化人類学』や『演習』、そして『総合研究』（卒論指導）もあった。（『演習』と『総合研究』は正確にいうなら「学科専門科目」ではなく「学部共通科目」なのだが、これは他学科に門戸を閉ざさないという原則ゆえにそうなっているのであり、実質的には学科専門科目だと言ってよいと思う。ただし『総合研究』が「学部共通科目」に入れられる理由には、後述するチーム制の精神も込められている。）これらのうち『演習』は別名3年ゼミで、通年で毎週1コマあり、専門書あるいは准専門書をピックアップして読むゼミであった。毎回ヘビーな宿題を課して発表させ、議論の時間を確保するために第2校時を延長して昼休み一杯まで続けたし、合宿も必ず行った。他方、『総合研究』は別名4年ゼミで、各自が自分の研究テーマを立てて調査研究していくものだが、私の場合、平均して12名程度のゼミ生の1人1人と2週間に1度、マンツーマンで1時間あまり面談するほか、夜ゼミと称して月に1度は全員集まって経過報告会を行うことにしていた。『総合研究』ではチーム制を採り、3ゼミくらいでチームを作って、構想発表会、中間発表会、そして最終発表会（口頭試問を兼ねる）を行うので、各学生の研究は複数教員の指導にさらされることになり、緊張感がよく保たれていた。チームを一緒に組んで下さった先生方のお顔が目に浮かぶが、その専門が

様々だったことに今更ながら驚かされる。チーム仲間となった先生方の専門は、哲学（3名）、倫理学、英文学（2名）、ドイツ文学（3名）、中国語学、文化人類学、社会学、自然地理学（2名）等、多岐にわたり、学科の垣根を越えることも珍しくなかった。どなたも例外なく、私の学生の発表を真剣に聞き、書き上がってきた論文を丁寧に読み、行き届いた論評をしてくださった。逆に私も素人目のスタンスを恥じることなく拝読し、色々と質問させてもらったものだ。

私の教養学部における日常仕事の思い出を綴ってみた。繰り返し言うなら、述べたかったのは、教員のひとりひとりが教養学部という特異な枠組みの中で、創立以来30年間、内容や方法こそ異なれ、上記のような教育仕事を真剣にやってきたということである。教わる学生たちからしても、全学における教育機能としても、そして教える者自身の仕事のやりがいからしても、総じてよい学部だった。場所柄、言えない欠点もあるので減点は必要だが、それでも80点は取れていたと思う。



経歴

1980年（昭和55年）3月 立教大学社会学部社会学科卒業

1984年（昭和59年）3月 東京大学大学院社会学研究科文化人類学専攻修士課程修了（社会学修士）

1989年（平成元年）3月 東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻博士課程単位取得満期退学

1989年（平成元年）4月 郡山女子大学短期大学部文化学科専任講師

1996年（平成8年）4月 東北学院大学教養学部助教授

2014年（平成26年）4月 東北学院大学教養学部教授